SELECTED STUDENTS´ WORKS

from studio course 2002

TAKEYAMA STUDIO "A HOUSE FOR ONE"

TOSHIHIRO MOTOKI

ATSUSHI KAWANISHI

FUMIKO TAKAHAMA

TAKADA STUDIO "RELATIVITY OF THE BOURANDARY"

KEIICHI OGATA

YUYA OISHI

TAKAMATSU STUDIO "STRONG / WEAK ARCHITECTURE"

TATSUYA KAWAHARA

RIE IKEDA

スタジオコース

学部の４回生は毎年「スタジオコース」と呼ばれる設計演習課題に取り組むことになる。

それぞれの担当教官が独自のテーマを設定し、学生はそのテーマに応じて、自らの望むコースを所属する研究室に関係なく自由に選択するといった、いわば卒業設計の前哨戦だ。

その様々な作品の中から、3コース7名の作品をここに紹介する。

STUDIO COURSE

In the 4th grade, undergraduate students take the design class called ´studio course´.
Each professor sets up his original subject, and students select freely regardness of their laboratory. These studios, so called, are ´the preliminary skirmish´ of diploma projects.
We will introduce 7 works among the various courses.

STUDIO OF K　A HOUSE FOR ONE IN TOKYO AOYAMA

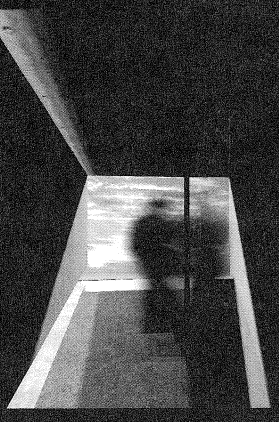
Toshihiro MOTOKI

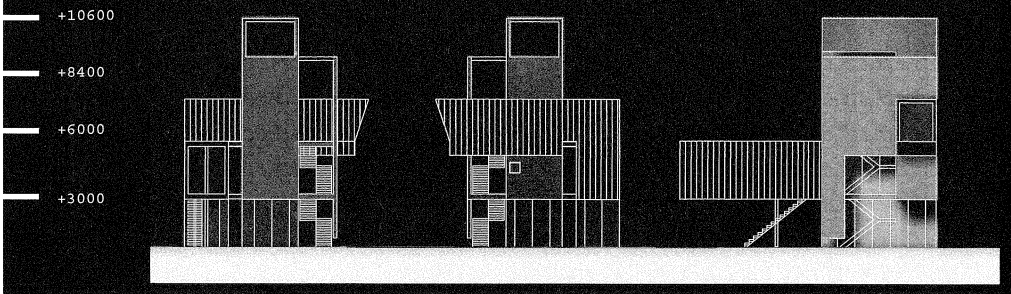
「昔ヴァギナのでっかい大富豪の女とつき合っていてね、まあ婚約までしたんだけど結局別れることになったんだよ。
周りの奴らはその娘に、お前みたいな奴はいつになっても結婚できないって言ってたし俺にも、どうせ金目当てで
つき合ってんだろ、とか言ってたなぁ。」

「あ、そうそう。さっき話した女の子から別れ際にリキテンシュタインの『鏡を見る少女』をもらったんだよ。凄いだろ。
本物だぜ、本物！」
「２回言わなくてもいいっすよ。」
「見たい？見たいだろ？」
「だから2回言わなくていいですってばしつこいなぁ。別にいいっすよ。俺別にゲイジュツとかに興味ないし…」
「そうか、そんなに見たいか、よしよし、ちょっと待っとけよ。」
「ちょっとぉ…」

「よく見ろよほら。かわいいだろ。こいつは歳をとらないんだぜ。太陽が何回昇ろうが、俺達がどれだけ老けようが、
お前のバカ彼女がどれだけシワシワニなろうがな。ハッハッハ。」
「うるさいなぁ。当たり前じゃないっすか、絵なんだから。」

「でさ、今度この絵を飾るための画廊を建てようと思うんだ。ついでにそこに家もつけてもらって、そこで生活しようかなって、
このリキテンシュタインの『鏡を見る少女』と一緒に…。」

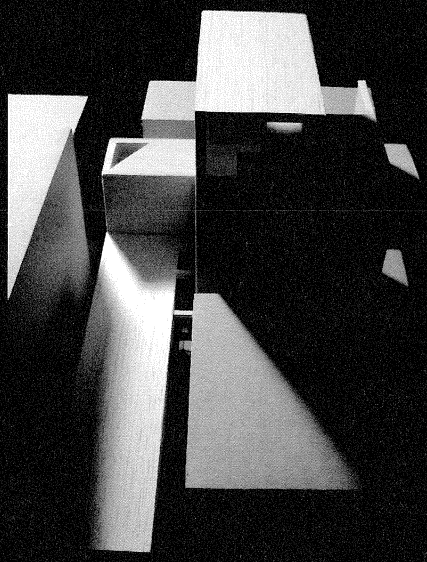




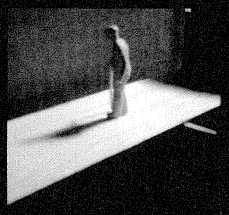
north elevation south elevation west elevation

SITE:Tokyo Aoyama
FUNCTION:Tenant+House+Studio
CLIENT:K ♂
Structure:S,SRC

outside stair

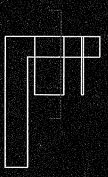


1F tenant (public space for the city)

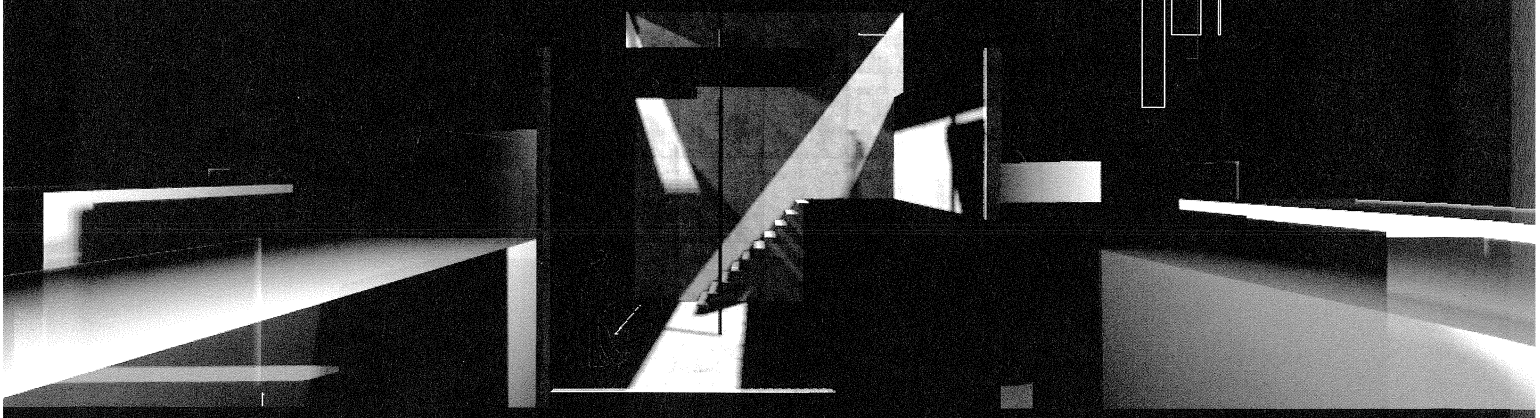


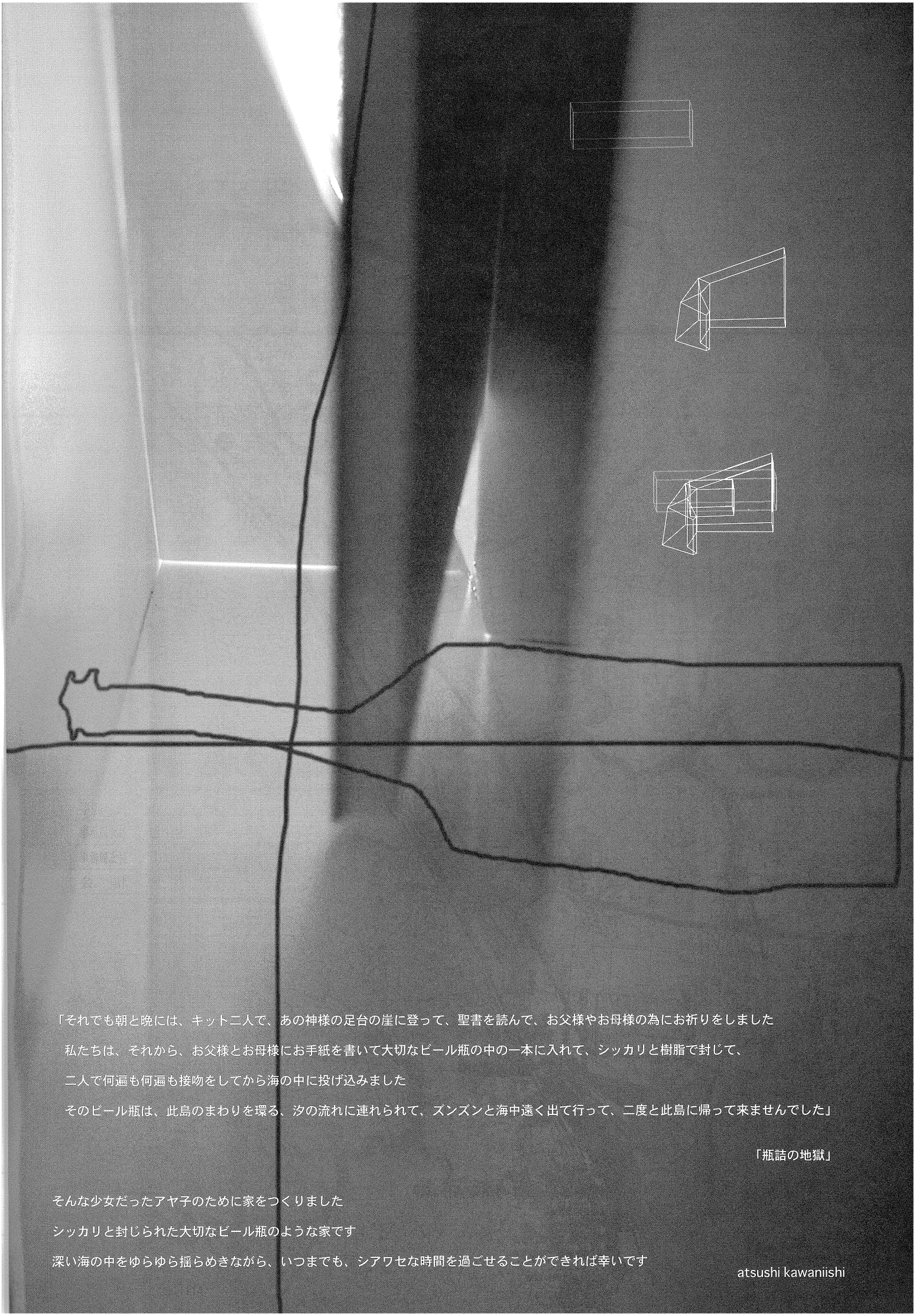
roof terrace

A man living with many kinds of light



section of residental part
(penetrating three slubs)





「それでも朝と晩には、キット二人で、あの神様の足台の崖に登って、聖書を読んで、お父様やお母様の為にお祈りをしました
私たちは、それから、お父様とお母様にお手紙を書いて大切なビール瓶の中の一本に入れて、シッカリと樹脂で封じて、
二人で何遍も何遍も接吻をしてから海の中に投げ込みました
そのビール瓶は、此島のまわりを環る、汐の流れに連れられて、ズンズンと海中遠く出て行って、二度と此島に帰って来ませんでした」

「瓶詰の地獄」

そんな少女だったアヤ子のために家をつくりました
シッカリと封じられた大切なビール瓶のような家です
深い海の中をゆらゆら揺らめきながら、いつまでも、シアワセな時間を過ごせることができれば幸いです

atsushi kawaniishi

第一の手紙の内容

[illegible]

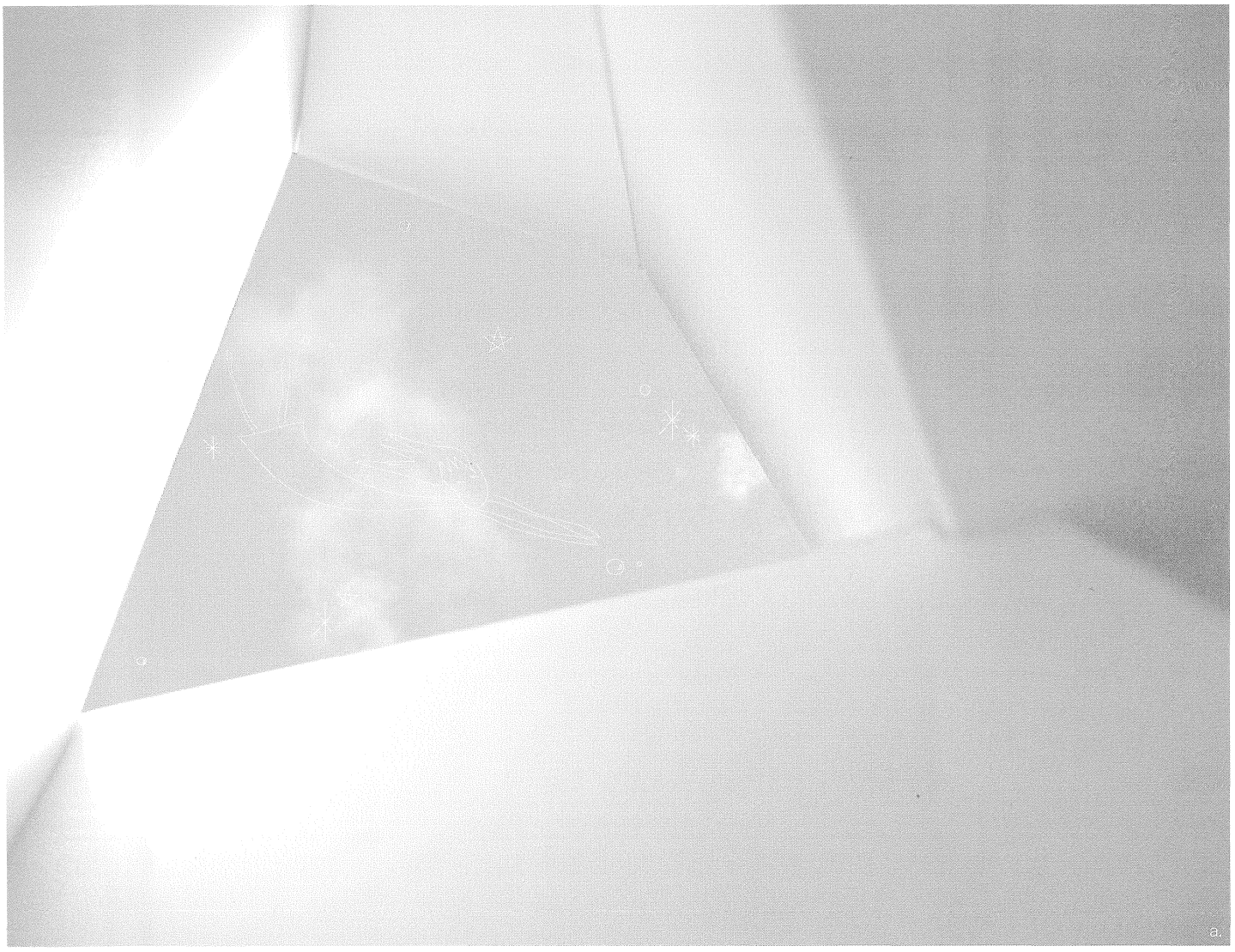
[illegible]

[illegible]

"SUYA SUYA" HOUSE

A house for ONE　TOKYO COLLECTION
2002 S/S　Takeyama studio
site:AOYAMA

design,photography,layout
FUMICO TAKAHAMA

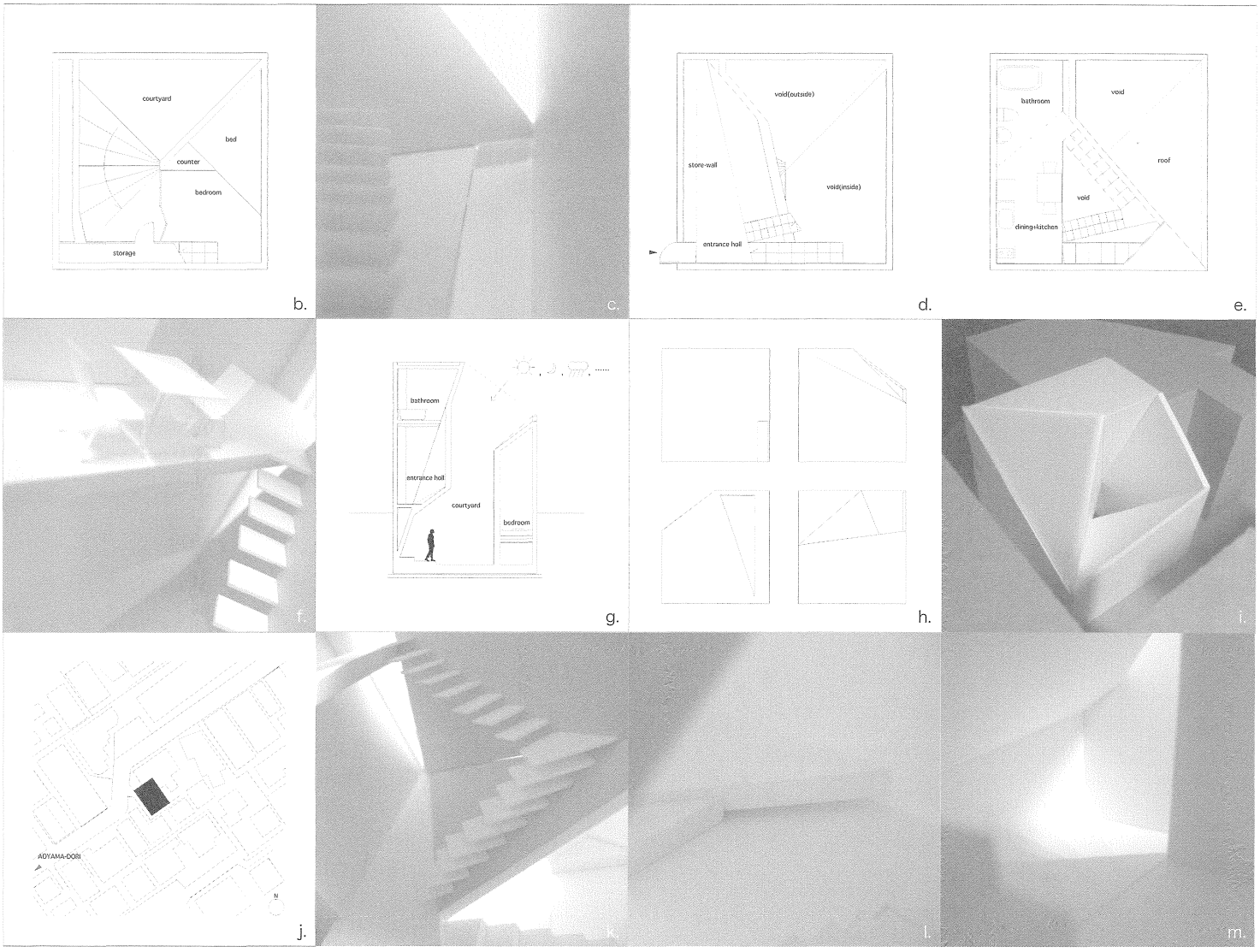


いつから私はひとりでいる時、こんなに眠るようになったのだろう。潮が満ちるように眠りは訪れる。もう、どうしようもない。
その眠りは果てしなく深く、電話のベルも、外を行く車の音も私の耳には響かない。なにもつらくはないし、淋しいわけでもない、そこにはただすとんとした眠りの世界があるだけだ。
……
いつから眠りに身をまかせるようになってしまったのだろう。いつから抵抗を止めたのだろう……私が溌溂としていつもはっきり目覚めていたのはいつ頃なのだろう。
それはあまりにはるかすぎて、太古のことのように思えた。シダや恐竜が荒々しく生き生きとした色で目に映る、遠い昔のことのようにかすんだ画面としてしか思い出せなかった。……

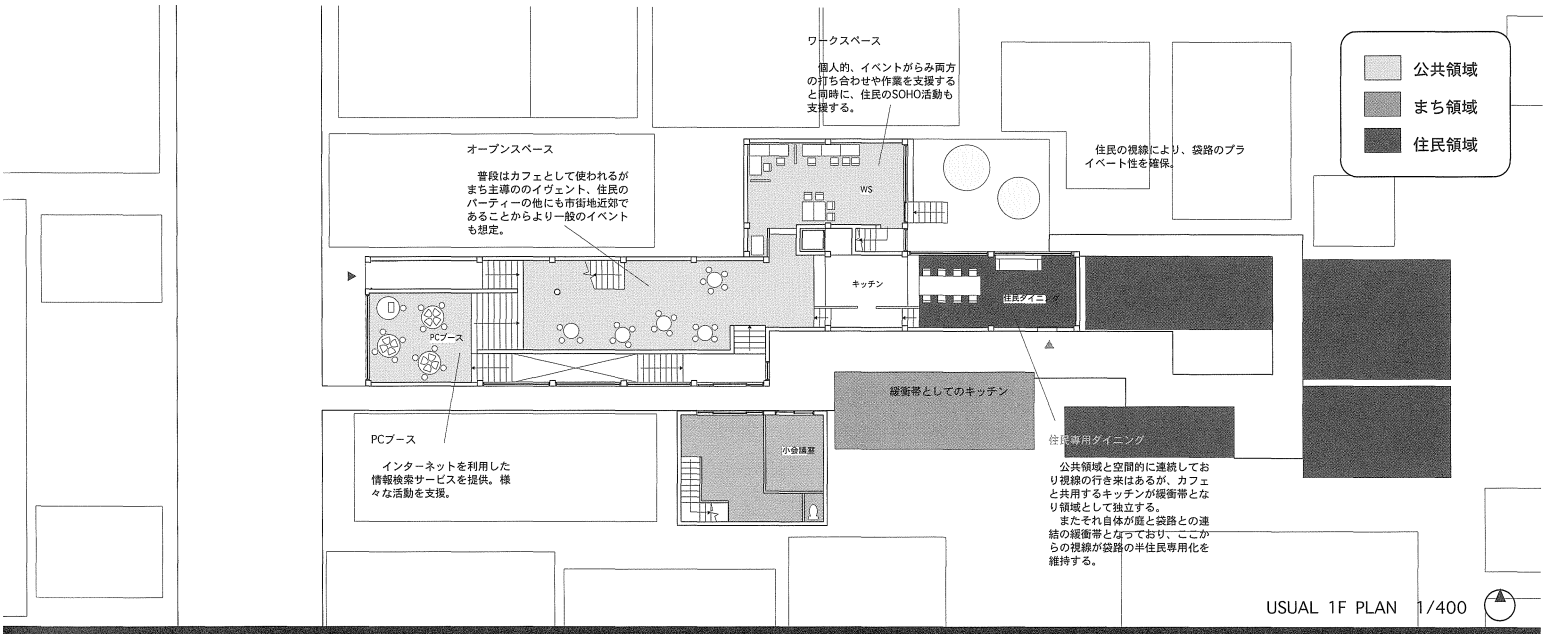
……まるで祈りのような気分だった。
この世にあるすべての眠りが、等しく安らかでありますように

吉本ばなな「白河夜船」　より

彼女の生活の大半を占めている睡眠というものについて。眠りは、現実から自由になる時間を与えてくれる。眠りについてしまえば、空間が与える影響などないに等しいように思われる。
眠りの空間が関与できるとすればそれは、眠りにいたるまで、そして目覚めるまでのほんの少しの時間しかない。
「眠りの拡張」をテーマにする。
具体的には、地下に寝室と中庭空間(=SUYA SUYA SPACE)。薄暗い地下へと下っていくと寝室、そしてその先には空を吸い込み、切り取るチューブ状の中庭が現れる。
そこは睡眠をとる場であることはもちろん、自然と世界とじかにつながりながら、全ての束縛から解放される、眠りのような時間を彼女に提供できないだろうか。

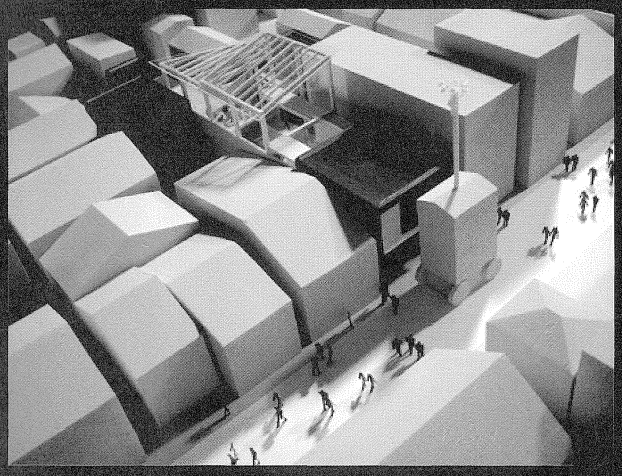


a. "SUYA SUYA" SPACEから空を見上げる b. basement floor plan 1/200 c. entrance hollから、toplightを見上げる d. ground floor plan 1/200 e. second floor plan 1/200
f. 吹き抜けからsecond floorを見る g. section+diagram 1/300 h. elevatioon 左上から時計回りにnorth-east, north-west, south-west, south-east 1/400 i. 鳥瞰図 j. site plan 1/2000
k. l. m. "SUYA SUYA" SPACEへのアプローチ。ground floorから地下へ、bedroomが見え、そして中庭に落ちる光に誘われる



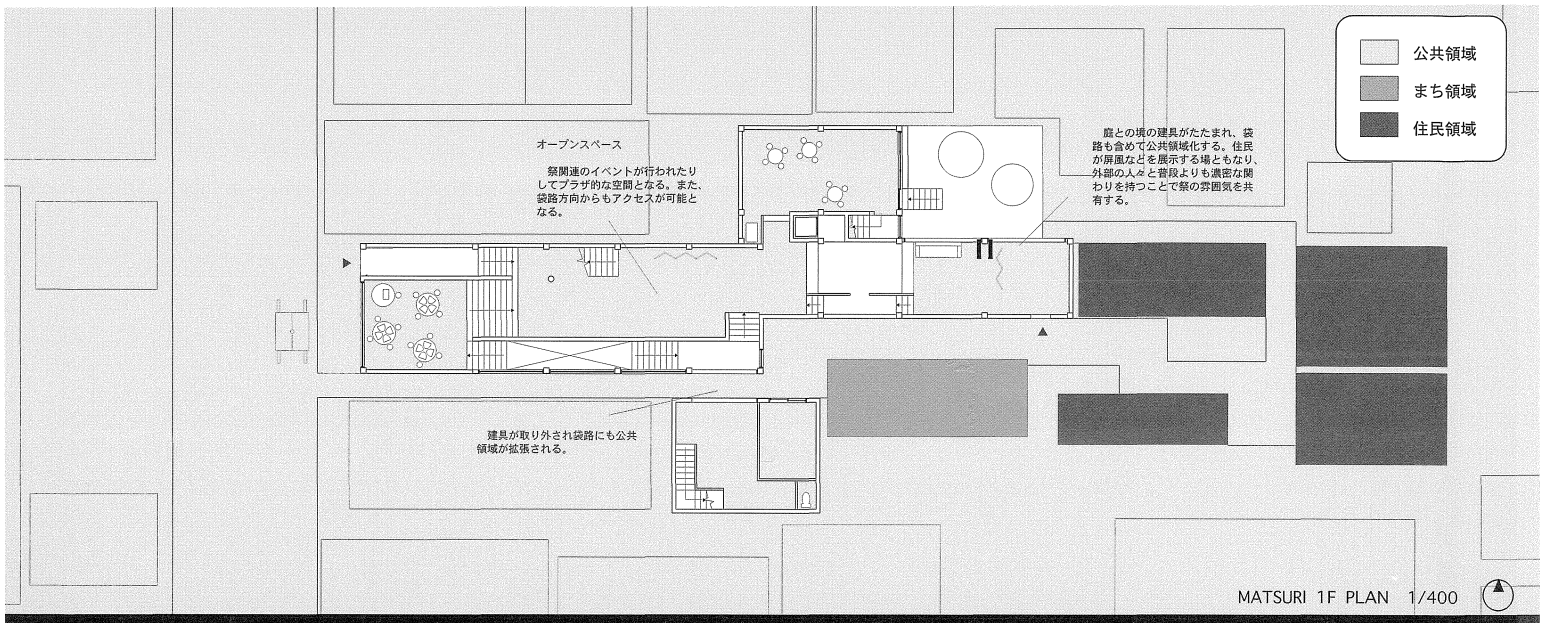
USUAL 1F PLAN 1/400

RYOUIKI→TRANS K. Ogata

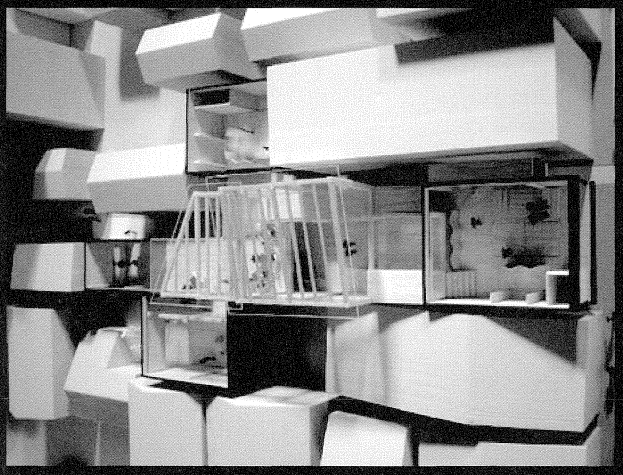


敷地は四条烏丸近くの百足屋町。普段は車で騒々しいが、祇園祭時には南観音山が立ち町の雰囲気は一転する。

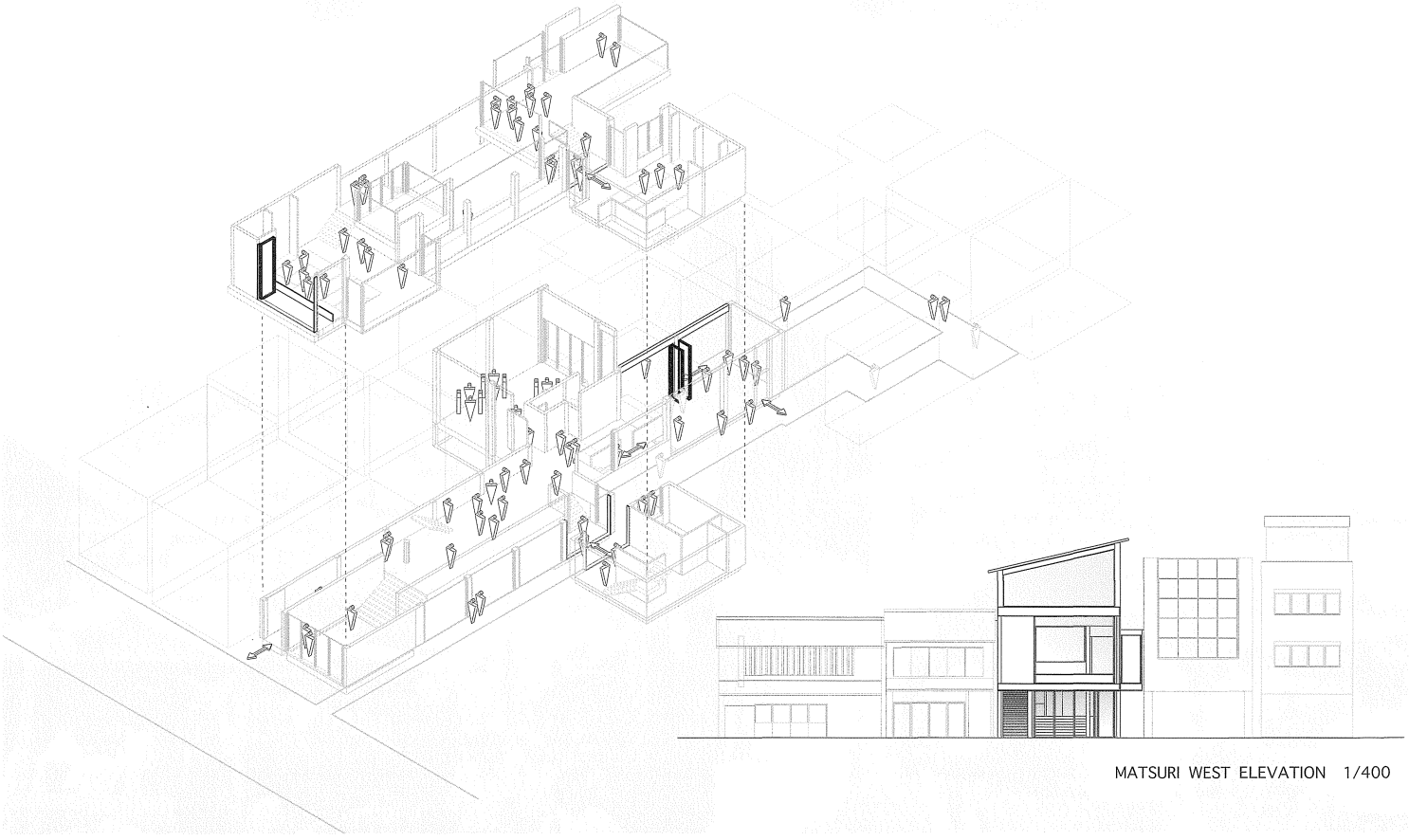
USUAL WEST ELEVATION 1/400



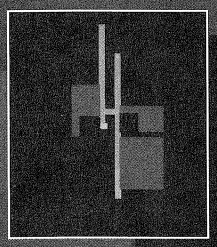
MATSURI 1F PLAN 1/400

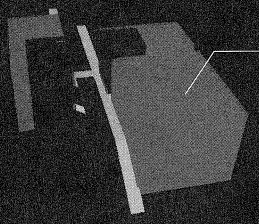


空間の折曲や視線等の心理的要因で領域を緩やかに分節することで、使用者が領域の境界を主体的に転換することが可能となる。



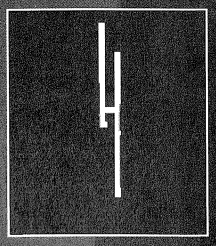
MATSURI WEST ELEVATION 1/400





COOPERATION

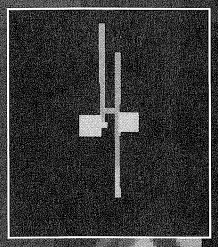
表通りに面する宅地を含む
隣接する住戸間の協調建て替え

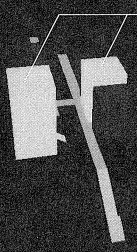


CIRCULATION

隣接する敷地と接続するための通路（幅1200mm）
を設けておく。

建て替えの各段階で各住戸に回遊性を持たせる。

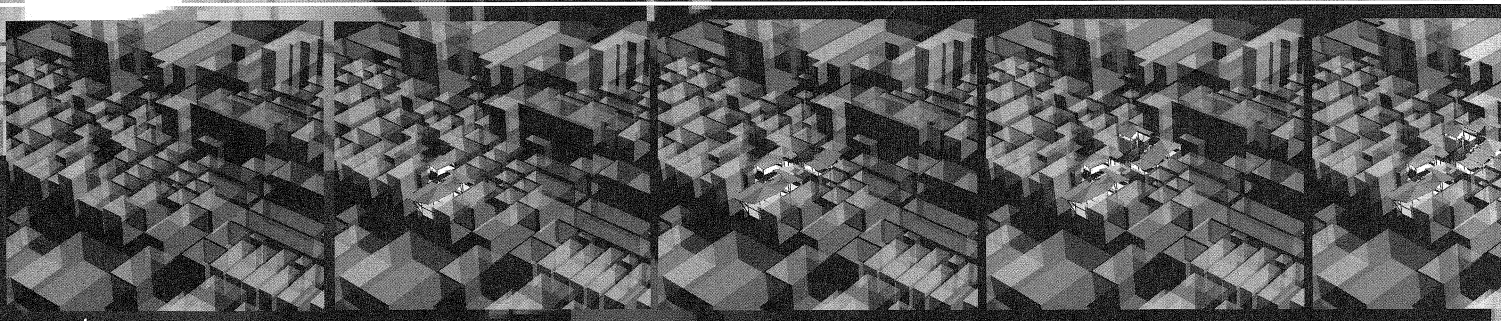




VOID

二階以下の高さに表通り側の宅地に接する形で採光・
通風のためのヴォイド（敷地の２５％の正方形平面、
上部吹き抜け）を設ける。

Connected Isolation



growing process

京都の街区に多数存在する袋路、これに面した住宅地では老朽化が進んでいるものの、その大半が既存不適格で、現行法規上では建替が事実上困難であり、空洞化や、コミュニティ・産業の弱体化の要因の一つとなっている。

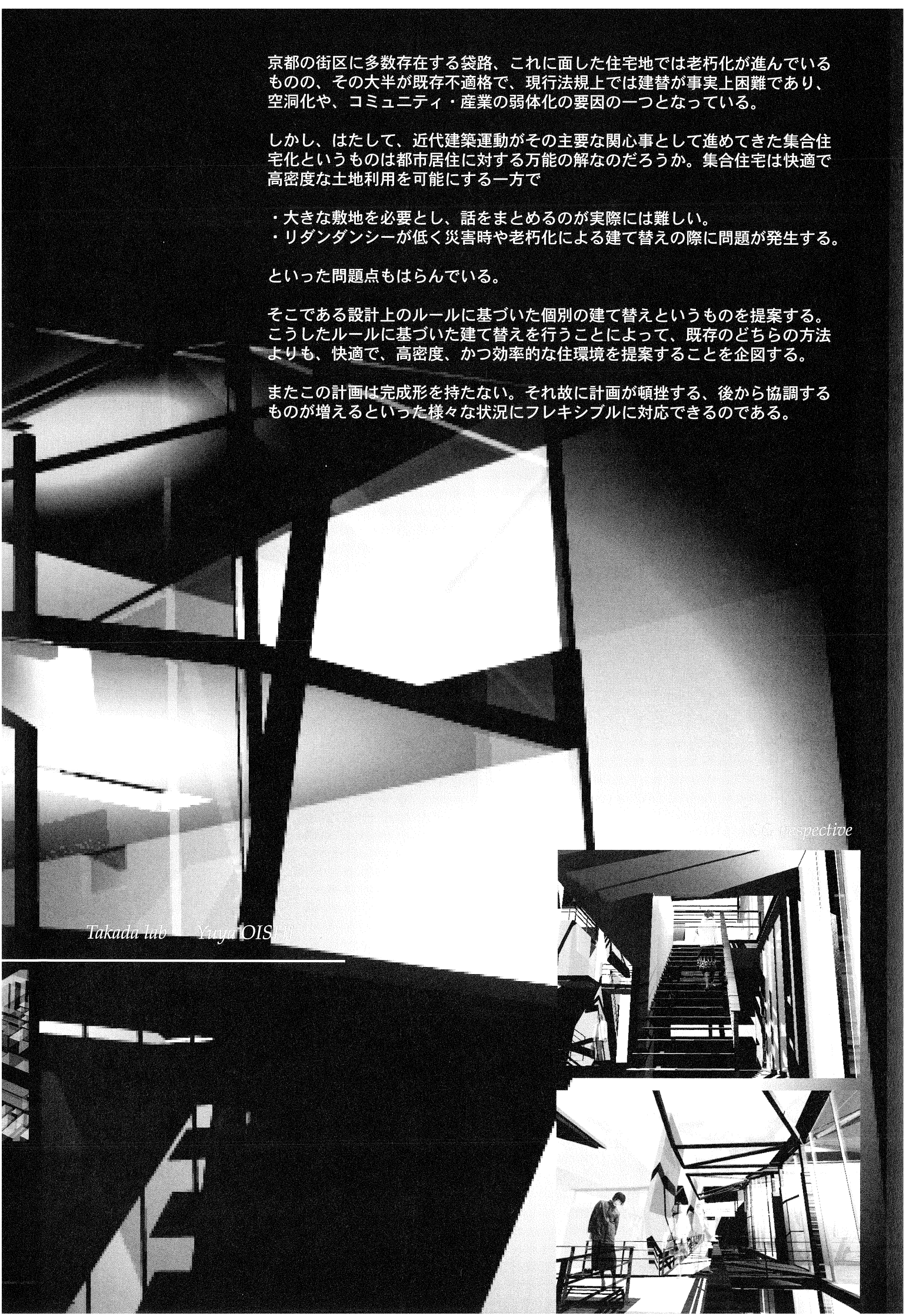
しかし、はたして、近代建築運動がその主要な関心事として進めてきた集合住宅化というものは都市居住に対する万能の解なのだろうか。集合住宅は快適で高密度な土地利用を可能にする一方で

・大きな敷地を必要とし、話をまとめるのが実際には難しい。
・リダンダンシーが低く災害時や老朽化による建て替えの際に問題が発生する。

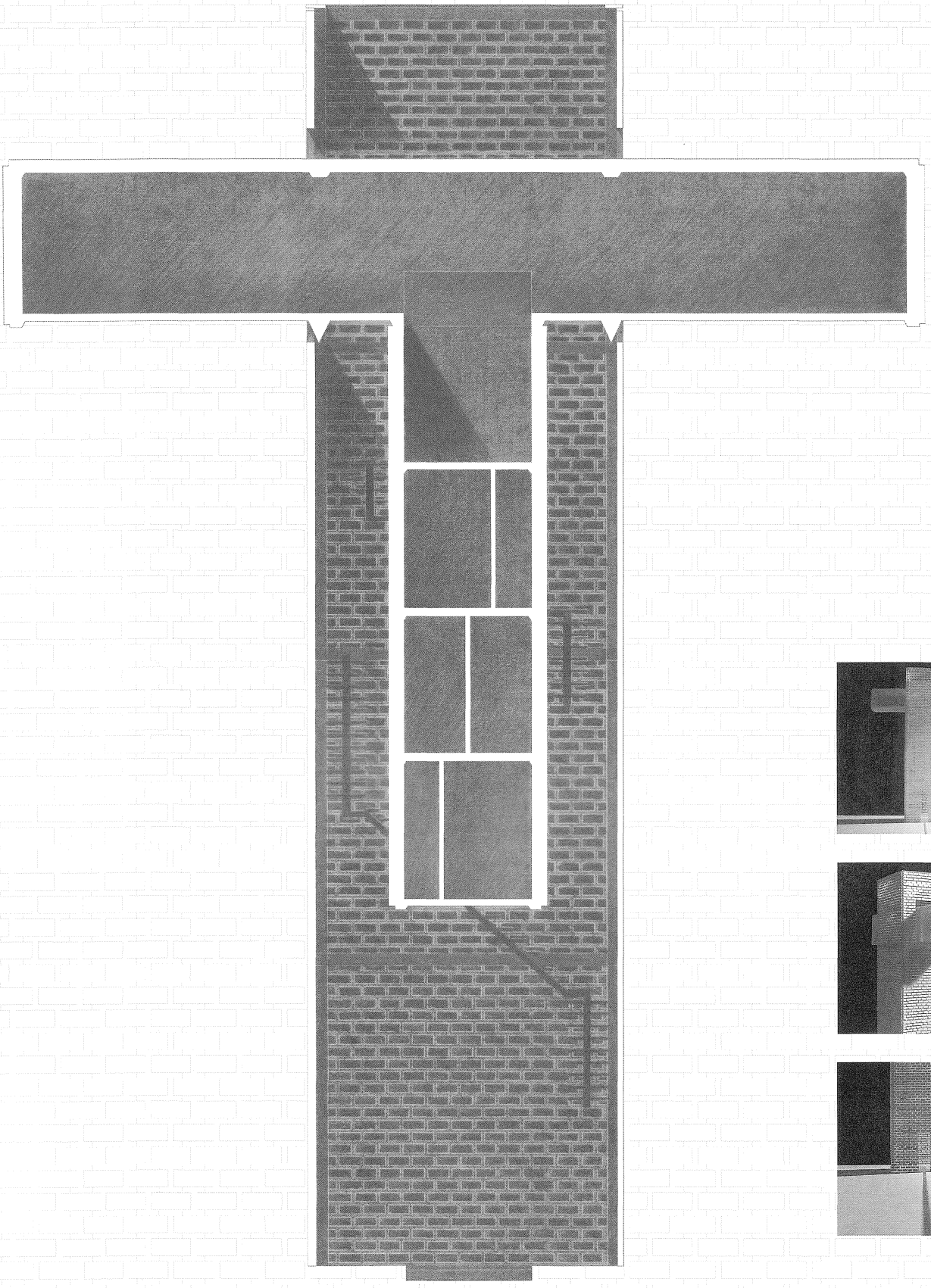
といった問題点もはらんでいる。

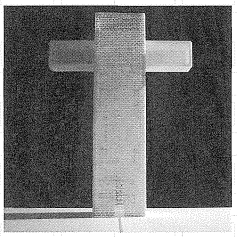
そこである設計上のルールに基づいた個別の建て替えというものを提案する。こうしたルールに基づいた建て替えを行うことによって、既存のどちらの方法よりも、快適で、高密度、かつ効率的な住環境を提案することを企図する。

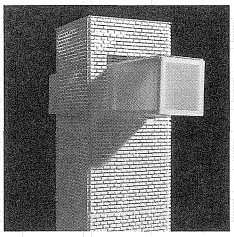
またこの計画は完成形を持たない。それ故に計画が頓挫する、後から協調するものが増えるといった様々な状況にフレキシブルに対応できるのである。

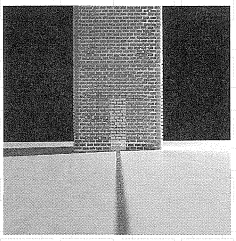


Perspective









[illegible] KAJIYA [illegible] の見せる dated-looking 一般は日付という既存の道具で時間軸に線を引っ[illegible]かしこれらふうに客観的かつ冷静な評価を下していると

APR.5.1987

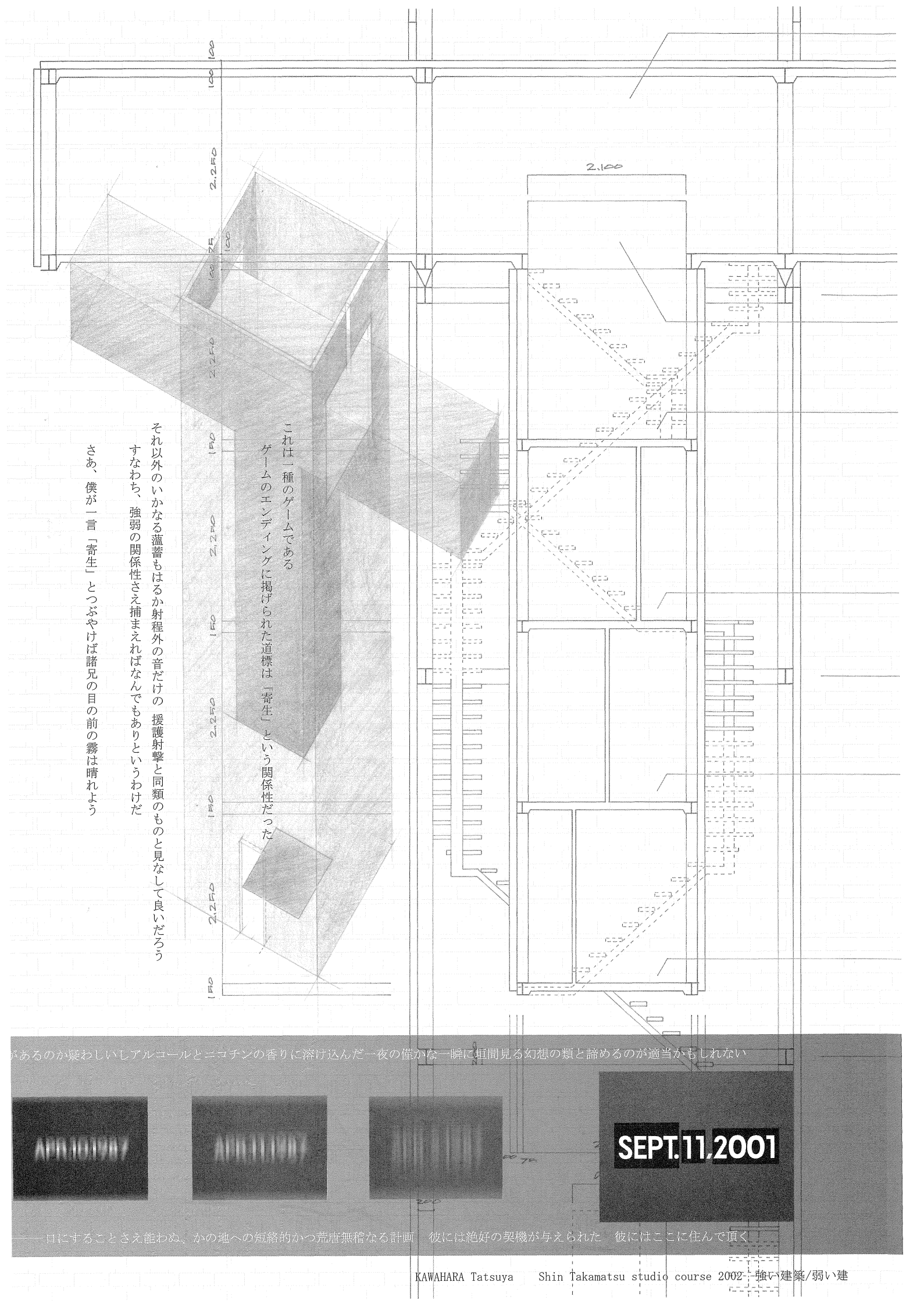
APR.6.1987

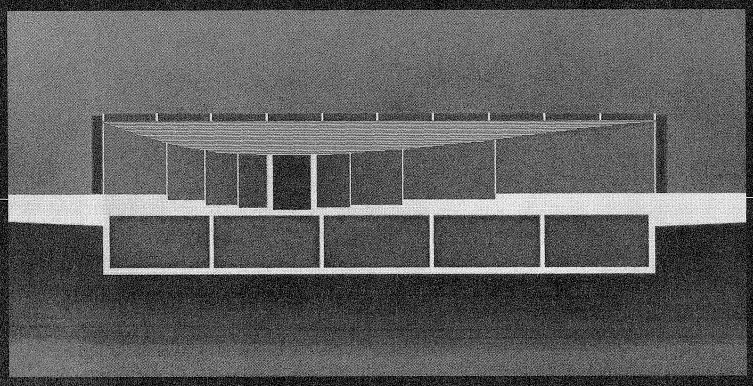
APR.7.1987

APR.8.1987

APR.9.1987

[illegible] 女性が美しいと目にする場合といささかの違いもないのかもしれない。[illegible] 元々も高等表現に依存した理解と伝達にどれほどの意味


2,100
これは一種のゲームである
ゲームのエンディングに掲げられた道標は「寄生」という関係性だった
それ以外のいかなる薀蓄もはるか射程外の音だけの 援護射撃と同類のものと見なして良いだろう
すなわち、強弱の関係性さえ捕まえればなんでもありというわけだ
さあ、僕が一言「寄生」とつぶやけば諸兄の目の前の霧は晴れよう
があるのか疑わしいしアルコールとニコチンの香りに溶け込んだ一夜の僅かな一瞬に垣間見る幻想の類と諦めるのが適当かもしれない
SEPT.11.2001
一目にすることさえ能わぬ、かの地への短絡的かつ荒唐無稽なる計画　彼には絶好の契機が与えられた　彼にはここに住んで頂く
KAWAHARA Tatsuya　Shin Takamatsu studio course 2002 - 強い建築/弱い建



写真家、杉本博司。

『seascapes』と名付けられた数々の写真。

その中央を横切る水平線に分割された空と海、光と闇、空虚と物質。

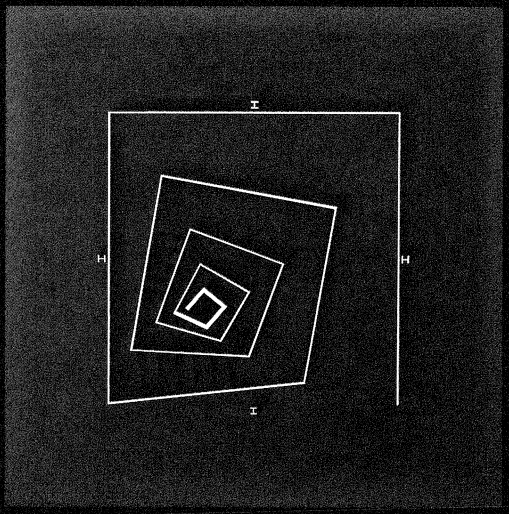
水平線に住むための住宅は海に浮遊する。

写真家である住人は厚さ2cmの石板の層による光の減衰の中をガラスの

壁に導かれ彼の巣穴に辿り着く。

SEASCAPE/HORIZONTAL HOUSE

Rie Ikeda



「問題解決」から「問題提起」へ

１９９２年に京都大学に戻って驚いたのは、私の学生時代から設計課題がほとんど変わっていなかったことだ。個別の課題にはもちろん若干の変化がある。しかし全体を貫く精神は、十年一日どころか、二十年一日の如しであった。
ひとことで言うなら、それは「問題解決」型の課題なのであった。解かれるべき命題を与え、ふさわしい解決を求める。
プランニングによって問題を解決してゆく能力は、もちろん建築設計に求められる基本的資質である。そのこと自体に問題はない。しかしこれを同じ敷地で延々と繰り返していくうちに、小手先のテクニックと堕してゆく。
課題の敷地模型が前年の学生から代々受け継がれてゆくという甚だしい手抜きも生れ、建築本体すら継承されたりもする。発想の新しさより何より、うまく解けているか、これに評価のすべてがかかっていた。
たったひとつの答えなどない、唯一絶対の解決などない、これが建築設計の醍醐味であるのにもかかわらず、である。
確かに現実社会に出ればほとんど「問題解決」型の思考ばかりが求められるのであって、だからこそ学生時代にそのトレーニングをするのだという考え方も成り立つのであろうけれども、私は逆の発想を持つ。
社会に出れば否が応でも目の前の現実に対処するばかりになりがちなのだから、その中にささやかにでも夢を込める心の余裕を培うためには、学生時代にこそ、自由な構想力を育んでおかなければならない。だからこそ、単に「問題解決」型の課題でなく、「問題提起」型の課題をこなさなければならない、と。
「問題提起」型とはどのような課題であろうか。このことを試行するために、スタジオコースを立ち上げたのである。1995年のことだ。すなわち単に解かれるべき課題を与えて建築にまとめるトレーニングをするのでなく、いかなるやり方で問題を設定しこれを提示していくか、建築を発想する場の境界条件を自ら定めるトレーニングを行う。４回生前期の設計演習をこれにあてた。
課題のテーマの設定から演習の方法まで、４月から７月までの期間が教官ひとりひとりのまったく自由な裁量に任される。たとえば昨年の私のコースでは前年に続いて「独身者の住まい」をテーマとしたが、敷地を京都から東京青山に移し、４月には敷地調査を兼ねて東京に合宿し、あわせて幾人かの建築家の事務所を訪れ建築の現場に触れる機会を持ち、７月には青山のギャラリーで展覧会も行った。会期中には連日東京の学生たちとディスカッションが企画され、ゲストに最前線で活躍中の建築家たちを招いて講評もいただいた。
スタイルの確立されたスタジオもあり、たとえば高松先生のスタジオでは、毎年必ず真っ白なハードカバーの製本が義務付けられている。
７月はじめにすべてのスタジオ合同の講評会が行われ、ここに卒業設計を残してすべての学部の設計課題が終了するのである。

竹山聖